

サルビア

西村 悟郎(文化学科)

サルビアといえば夏の花壇で真っ赤な花を咲かせる、和名でヒゴロモソウと名づけられた*Salvia splendens*が思い出されるが、*Salvia*属には約750種が含まれ、世界の熱帯、温帯に分布している。その中には、鑑賞用の一年草、また宿根草、低木や、薬用植物、また日本の山野に自生するキバナアキギリ(*Salvia nipponica*)などの野草も含まれる。*Salvia*属はシソ科に含まれ、属名の*Salvia*はラテン名の*salveo*(医やす)という意味である。属名の和名はアキギリ属という。その栽培は薬用植物としては古代ギリシャ、古代ローマの時代までさかのぼり、観賞用としては一年草がイギリスの産業革命の時代に大流行する。また、多くの宿根草の種類はボーダー花壇には欠かせないものとなっている。サルビアは現在最も親しまれた園芸植物であり、また人類の歴史とともに歩んできた身近な植物でもある。サルビアには園芸、薬用植物として実に奥の深い世界がそこにはある。ここでは、サルビアの世界に案内したいと思う。

1. 春まき一年草として扱われるサルビア

夏から秋にかけて花壇をにぎわすサルビアの仲間、最近種類が多くなってきている。それをうまく使いこなすと、サルビアを中心としたベッド(模様花壇)や一年草のボーダー花壇を作ることでもできるくらい種類が豊富になっている。それらを紹介しよう。

1) *Salvia splendens* (和名ヒゴロモソウ、英名Scarlet Sage)(第1図)

夏から秋にかけて輝くような赤い花を咲かせる本種は*Salvia*属の中では最も花壇に多く用いられるもので、普通サルビアといえば本種をさす。*splendens*は「強い光沢のある、光輝ある」の意味で、この花の赤く輝きのある

色からきている。本種はガク片と
花弁が同じ色をしており、花弁が
落ちた後もガク片が赤い色を維持
して花壇材料として非常に有効で
ある。ブラジル原産で、春山(1980)
は17～18世紀にヨーロッパに導入
された多くの新大陸原産の植物の
一つにあげているが、塚本(1963)



第1図 *Salvia splendens* 'ホットジャズスペシャル'

は1822年にヨーロッパに導入と紹介している。特に、イギリスでは19世紀のヴィクトリア時代になると産業革命によって人々の生活が豊かになり、各家庭でも花壇が作られるようになってきた。そこには多くの外来の草花が用いられたが、本種は其中でも主要な草花のひとつであった。また、この時期は鉄道の普及によって各地に保養地が作られ、駅周辺や観光地に大規模な毛氈花壇が作られるようになり、本種は主役をはたした。この頃、温室が発達してきて生産業者は促成栽培によって苗を育て、季節より早めの苗を売り出した。その様子は、春にはもう本種が見られる現在の日本の苗事情と似ており、こういう傾向はもうこの頃から始まっていたことを物語っている。また、日本の秋の国体ではコンテナに植えたサルビアが町や会場を飾るが、これも19世紀のイギリスの風景に似ているといえる。日本には明治28年(1895年)に入っている。本種を地方公共団体の花に指定している自治体も多く群馬県桐生市、愛知県安城市、岐阜市、三重県四日市、山口県下松市などが市の花としている。

現在主に使われている品種としては、草丈が70cmになるボンファイヤー、40cmのホットジャズ、30cmのリトルタンゴなどで、花壇でも丈夫で頼りになる。花が赤以外のものとしては、シズラー系やドレスパレード系の桃、紫、白、ラベンダーなどがあるが、赤の品種ほどには花にボリューム感がないので物足りないが、ボーダーの前段に用いるのには強い赤より柔らかい色が適している。本種は根の張りが浅いので、夏に水が切れるとすぐに萎れる。夏の灌水をしっかりとやると株がよく茂って秋の霜が降りるまで咲き続ける。特に秋に気温が下がってくると花の色が冴え、美しさが増してくる。

2) *Salvia coccinea* (和名ベニバナサルビア、英名Texas Sage)(第2図)

*coccinea*は「緋紅色の」という意味。北米の南カロライナ、テキサスの原産で、1772年にイギリスに入り、明治12年(1879年)に日本に渡来した。花はガク片が緑で花卉が着色する。本種はイギリスおよび日本へは *S. splendens* より早く入っているが、*S. splendens*の方が圧倒的に普及して、本種はあまり使われることはなかった。しかし、この10年来



第2図 *Salvia coccinea* 'コーラルニフ'

新品種の登場とともに、花壇でもよく見かけるようになってきた。「レディインレッド(赤)」、「コーラルニフ(ピンク)」、「ホワイトニフ(白)」の登場である。これらの花は *S. splendens* のようなボリューム感はないが、花序はほっそりした実にすがすがしい姿をしており、ボーダー花壇には最適である。特に、「コーラルニフ」はお勧めである。草丈は60cmくらいだが、肥料が効きすぎると1mくらいにもなる。コンテナに植える場合は、肥料は控えめにしたほうがよい。夏の暑さにも強く元気に開花する。本種は宿根化しやすく、日当たりのよい庭の隅に植えておけば毎年育てて花を咲かせる。葉には香りがあるので、乾燥させてポプリとして用いることもできる。

3) *Salvia farinacea* (和名ブルーサルビア、英名Mealycup Sage)(第3図)

*farinacea*は「粉質の」の意。葉の表面が粉質であるところからきている。北米テキサス原産で、イギリスには1847年に入っている。草丈は50~60cmで、花が密についた総状花序を作る。花の色は青と白があり、*S. splendens* のような派手さはないが、夏の花壇には欠かせないものである。特に青い花の少ない夏のボーダーでは非常に重要な役割を果た



第3図 *Salvia farinacea* 'ピクトリアブルー'

す。品種としては「ビクトリアブルー(青)」、「ビクトリアホワイト(白)」が最も馴染み深い、「ナナディーブブルー(濃青)」、「シリウス(白)」、「ストラータ(青と白の混色)」などの新しい品種も登場している。夏は水を切らさないように十分に灌水すると、よく育って秋まで開花する。比較的寒さにも強いので、関東南部では宿根草として冬を越す。

4) *Salvia viridis* (和名ムラサキサルビア、英名Annual clary, Joseph Sage)

*viridis*は「緑色の」の意。以前の学名は *S. horminum* で、今でも「ホルミナム」の名前がよく通っている。ヨーロッパ南部の原産で、イギリスにはチューダー朝時代の1596年に入り、日本には明治の中頃に入っている。本種は花は小さく鑑賞に値しないが、苞が茎の頂部で発達して帯色する。サルビアのイメージからかけ離れた花序の姿をしており、特色ある花壇材料として用いられる。品種にはマーブルアーチ系がありピンク、青、白の色が揃っている。集団として植えると花の美しさが増す。イギリスでは好んで用いられ、ウエストサセックス州のナイマンズガーデンで建物の壁際に集団として植えられていたのが印象的であった。

5) *Salvia patens* (和名ソライロサルビア、英名Gentia Sage) (第4図)

*patens*は「開出する」の意。花の形からきている。メキシコ原産でイギリスには1939年、日本には昭和初年(1930年ごろ)に入っている。草丈は60cmほどで茎頂に総状花序をつけ、対になって長さ6cmほどの上唇弁と下唇弁とげ大きく開いた花をつける。花色は澄んだ空色で美しい。一年草のサルビアとしては他の花にはない形と色をしているので大きく育てると特色ある花壇を作れる。ただし、花のつき方が他のサルビアに比べると密でないので、花壇に植えるとボリューム感に欠ける場合があり、株を幾分密に植えて、花を賑やかにしてやるとよい。



第4図 *Salvia patens* 'ブルーエンジェル'

以上、一年草扱いのサルビアを紹介したが、これらは原産地では宿根草あるいは垂低木であるが、園芸上は春まきの一年草として扱われている。*S. splendens*をはじめ、いずれも夏の花壇には欠かせない大切な材料になっている。歴史的には、コロンブスのアメリカ大陸発見以来、これらの植物は徐々にヨーロッパに紹介され、19世紀の産業革命以降花壇の普及とともにもっとも重要な花壇材料の一つになっていった。日本でも、明治以降徐々にこれらのサルビアは導入され、花壇を賑わしていった。特に戦後の国体の国内巡回とともに、*S. splendens*は全国に栽培が広がってゆき、夏から秋にかけて最も良く知られた花壇材料となった。また、その他のサルビアの仲間も、公園や家庭の花壇の材料として普及し、ボーダー花壇の材料としても欠かせないものとなっている。花の形の豊かさも花壇材料の豊かさにつながっている。

2. 宿根草のサルビア

イギリスのガーデンを訪ねて驚くのは、使われている宿根草の種類の豊かさであるが、その中でも宿根草のサルビアの多様さには目を見張るものがある。最近では日本でも宿根草のサルビアが見られるようになり、インターネットでは生産者が多くのサルビアの種類を写真付で載せている。これから日本でも宿根草のサルビアが広く栽培されていくことが期待される。宿根草のサルビアの多くは実は木性、あるいは半木性であるが、苗の段階では宿根草として扱われている。サルビアは愛好家も多く世界規模のサルビアの協会が組織されていて、今年(2008年)の8月にはカリフォルニアのApton市で世界大会が持たれる。ラン、バラ、アイリス、ダリアなどとならんでサルビアも世界規模の愛好家の協会をもつ植物のグループである。

さて、これから宿根草のサルビアを紹介するが、ここではボーダーに向くサルビアを特に選んで紹介する。

1) *Salvia greggii* (和名アキノベニサルビア、英名Autum Sage) (第5図)

S. microphylla (英名Baby Salvia)

*greggii*は人名(J. Gregg)にちなむ。北米テキサス州原産。*microphylla*は「小さな葉」の意。アリゾナ州、ニューメキシコ州原産。両者とも木立性。日本で

は両者ともチェリーセージの名で呼ばれている。gregiiの方が株がコンパクトで葉が長楕円形で細く密に茎に付き、秋になると株が花で覆われるくらいに花序には花が密に着く。草丈は50～60cm。それに対して、microphyllaは葉が卵形で前者より疎に着き、株がゆったり



第5図 *Salvia gregii*

と広がる。花は夏から秋にかけて前者に比べて疎につく。草丈は70～80cm。花の形は唇弁が発達しているところが両者よく似ているが、microphyllaは唇弁の基部に突起がある。最近、両者間の種間交雑種も出ており区別が難しくなっている。緑の葉に赤い花がまばらにつく。ボーダーの中心に置くこともできる。花の色としてはピンク、白、クリームもある。また、斑入りの葉の品種も出ている。寒さに強く、丈夫で日本でも作りやすく、最も良く普及した宿根サルビアのひとつとなっている。

2) *Salvia nemorosa* (第6図)

nemorosaは「森林生」の意。ヨーロッパから西アジアの森林に自生する。草丈は1m。この種の特徴は株がこんもりと茂り、花序が密に形成されることである。株を花が覆いつくすほどに長さ30cmほどの花序が立ち上がる。開花期は夏から秋。花色は紫から紅紫色、またピンク、白の園芸種もある。イギリスの庭園ではよく本種の大株を見かける。ボーダーには欠かせない種である。なお、本種を交配親とした *S. x superba*、*S. x sylvestris*が作出され、本種と同様に多数の花序を立ち上げる優良種として広く栽培されている。日本ではまだ普及が遅れているが、導入したい宿根サルビアのひとつである。



第6図 *Salvia nemorosa*

3) *Salvia sclarea* (和名オニサルビア、英名 Clary Sage) (第7図)

ヨーロッパから中央アジアかけて原産する。日本には1887年に渡来。草丈が1.2mくらいになる大型種で葉も長さが20cmを越す。6月に大型の円錐花序を形成する。花序には長さが3cmほどで薄紫色の花をたくさんつける。本種は多くのサルビアの種の中で最も雄大な花序をつける。和名のオニサルビアという名も、鬼のように「ごつい」花というイメージで付けられたのであろう。ボーダーにはぜひ欲しい種である。本種は夏の暑さで弱ってしまうので2年草扱いにして、毎年5~6月に種子をまいて育てたほうがよい。



第7図 *Salvia sclarea*

4) *Salvia involucrata* (英名 Rosy-leaf Sage) (第8図)

*involucrata*は「総苞のある」の意。苞が発達しているところからきている。グアテマラ、メキシコ原産で、1825年にヨーロッパに紹介された。草丈が1.5mになる大型種である。本種の特徴は蕾の段階で花がよく目立つ濃桃色の苞に覆われるところである。花が育ってくると苞は脱落する。花序の長さは30~40cmほどで長さ5cmほどのピンクの花を総状につける。花期は夏から秋。この花が咲くとその場所が華やいだ雰囲気になるのでボーダーの中・後段に用いるとよい。



第8図 *Salvia involucrata*

5) *Salvia uliginosa* (英名 Bog Sage) (第9図)

*uliginosa*は「湿地に生ずる」の意。ブラジル、ウルグアイ原産。草丈1mで細い茎は分枝し、その先端に短い花序をつける。茎が細いので風で倒れやすい。花序は密生しないで、幾分まばらに出てくる。この種の特徴は花色にあ

る。澄み切った空色をしている。サルビアの中で最も美しい空色といえる。株全体では花にボリューム感はないが、この花の美しい青はぜひボーダーに欲しい。



第9図 *Salvia uliginosa*

6) *Salvia leucantha* (英名Mexican Bush Sage)

*leucantha*は「白い花の」の意。メキシコ、中央アメリカ原産。草丈1mになる。何株か合せて植えると、秋には大きな群生となる。葉の表面は深緑で皺が入り、裏面には白色の短い毛で覆われる。10月ごろから30~50cmの長い花序に花をつける。花序は横向きか、幾分垂れるように着く。ガク片は藤青色の毛で覆われ、花は白い。数株を合せて植えると、大きく育って立派な花をたくさんつける。秋遅く咲くサルビアとして貴重である。本種は比較的最近栽培されるようになったが、今では最もよく見かける宿根草のサルビアとなってきた。強い霜に当たると株が弱るので、霜が降りる前に鉢あげして霜の当たらない場所に置き、春に植え戻す。

以上、6つの宿根草サルビアを紹介したが、いずれも丈夫で育てやすく、しかも美しい花をつける種類である。ボーダーに用いると、よく役割を果たしてくれる。宿根草のサルビアはまだまだ多くあり、花壇材料として可能性に満ちたグループである。

3. 薬用のサルビア

サルビアの中には薬用になる種が含まれるが、その代表的なものが *Salvia officinalis* (和名ヤクヨウサルビア、英名Common Sage) (第10図)である。日本でも一般ではセージと呼ばれている。*officinalis*は「薬用になる」の意。セージはスペインからバルカン半島にいたるヨーロッパ南部の地中海沿岸原産で草丈は50~90cm。葉は長さが8cmほどで長楕円形から卵形、灰白色の綿毛



第10図 *Salvia officinalis*

に覆われており、芳香がある。6～7月に頂生、また腋生の総状花序を形成し藤青色の花をつける。観賞用としても栽培されるが、もっぱら薬草あるいは料理用ハーブとしての利用されている。その歴史は古く、古代ギリシャ、ローマ時代からヨーロッパでは薬植物として用い

られてきた。古代ローマ時代に活躍したプリニウス（Gaius Plinius Secundus 23-79年）は「博物誌」の「植物薬剤篇」でセージの薬効について次のように述べている。「ブドウ酒とともに用いると遅れている月経を促進し、煎じ汁を飲むと月経過多を止める。この草そのものを貼ると傷の出血を止める。へびに咬まれたときには毒消しとなり、ブドウ酒に入れて煮つめると、睾丸の痒疹を鎮める。今日われわれのうちの植物学者はこれをギリシャ語でエレリスファコス、ラテン語でサルウィアと呼ぶ。ハッカに似て、灰白色で芳香がある。これを貼ると死んだ胎児を下ろし、潰瘍と耳の虫を除く。」（プリニウス、1994）この文章をみるとセージが当時から薬草として重要視されていたことが分かる。古代ローマの政治的支配がヨーロッパに広がってゆくと、セージも占領地で栽培されてことと考えられる。イギリスにもそのころに伝わったものと思われる。中世の修道院ではセージは薬草として大切に育てられたことであろう。イギリス人のジェラード（John Gerard, 1545-1612）は「セージの効力は万能で、強壮や止血、記憶力アップ、解熱などさまざまである。葉を酢に浸して作るセージ・ビネガーは疫病除けや毒消しに用いた。また、セージの乾燥葉をパイプにつめて煙草のように吸うと、喘息に効果がある」（麓、1999）とセージの薬効について述べている。また、「永遠に生きたいと願うものは、5月にセージを食べなければならない」（アディソン、2007）という言葉も残っている。

乾燥したセージの葉をお茶として飲む習慣もあり、17世紀に紅茶が中国から入ってくる前は、イギリスをはじめヨーロッパ各地で飲まれていた。中国との交易でオランダは乾燥したセージ葉を、紅茶と交換した。そして、中国

でもセージの葉が好んでお茶として飲まれた。その後、イギリスではセージに代わって主に紅茶が飲まれるようになっていった。

現在の生産地はユーゴスラビアのダルマチア地方とアドリア海沿岸。セージの乾燥葉には0.7～2.0%の精油が含まれ、主成分は *a-pinene*、*1,8-cineole*、*borneol* などである。咽喉炎やのどの潰瘍には酢や蜂蜜などを加えてうがい薬として、またお茶としては砂糖やレモンを加えて飲むと消化を促進し、解熱、強壯の効果がある。濃厚な煎液を潰瘍や靴擦れなどに塗り、頭に塗ると髪を黒くする効果がある(木村、1981)。セージの生の葉で歯茎をこすると歯が強くなるなるところから、広く歯磨き用として生のセージの葉が用いられた。セージは調理にも用いられ、肉の脂肪分を分解して臭みを消す効果があるため、肉料理に用いられる。特に、レバーやラムなどの臭いのある肉には適している。アメリカではセージ葉は最高の食品調味料として扱われている。イギリスの各家庭では家庭用の薬草、および料理用の、香料、調味料(ハーブ)としてセージが多く栽培されている。このごろ日本でもセージの栽培が広がってきている。関東以西でも低木として丈夫に育つセージはこれから日本の家庭薬、料理用のハーブとして栽培が広がることが期待される。

その他の薬用あるいはハーブとして用いられているサルビアには前出の *Salvia sclarea* がある。葉には香りがあり、リナロールやエステルが含まれる。香辛料や香料の原料となる。現在の主な生産地はウクライナのクリミア半島で、花からセージオイルを採っている。種子は水を含むと粘液質になり目の異物を取り除くのに用いられる。英名のクラーリーは「浄化」というラテン語で、目の異物を取り除くところからきている。その他には、*Salvia elegans* (英名Pineapple Sage) もハーブとして大切にされている。メキシコ原産で草丈は1.5mにもなる。葉がよく茂り秋には総状花序を伸ばして鮮紅色の花をたくさんつける。非常に美しく、観賞用にボーダーで植えることもできる。葉にはパイナップルの香りがあり英名の由来になっているが、飲料、ジャムやゼリーの香料に用いられる。寒さに弱いので、霜が降りる前に掘りあげて鉢で冬を越す。

4. おわりに

サルビア属に含まれる植物は人類にとってかけがえのないものとなっている。一年草には夏の毛氈花壇を飾るもの、リボン花壇で長く帯状に咲きそろうもの、コンテナの寄せ植えに添えられるもの、一年草ボーダーではその中心の位置を占めるものなどがある。一方、宿根草のサルビアは種類が多く宿根草ボーダーには欠かせないものとなっている。花色も赤、青、紫、黄、クリーム色と多彩である。ヤクヨウサルビアは古代の時代から薬草として常に人類とともにあり、調味料、香料として食事を楽しいものとしてきた。また、ハーブガーデンの中心的存在となっている。このような植物群が与えられていることは人類にとって幸せである。

参考文献

- アディソン, J (樋口康夫・生田省悟訳) 2007 花を愉しむ辞典 pp.97-98、218-220
八坂書房
- ウェルズ, D (矢川澄子訳) 1999 花の名物語 100 pp. 95-97
- 木村康一・木村孟淳 1981 原色日本薬用植物図鑑 pp. 193-194 保育者
- コーツ, A.M. (白幡洋三郎・白幡節子) 1999 花の西洋史 pp. 220-224 八坂書房
主婦の友社編 1996 香りと花のハーブ図鑑 500 p. 85 主婦の友社
- 田中孝治 2002 家庭で使える薬用植物大事典 p. 149
- 塚本洋太郎 1963 原色園芸植物図鑑 Vol. I pp. 113-116 保育者
- 塚本洋太郎 1964 原色園芸植物図鑑 Vol. III pp.91-92
- 塚本洋太郎・木島正夫 1978 朝日百科 世界の植物 Vol. 2 pp. 219-220
- 塚本洋太郎・横井政人・横山二郎 1988 園芸植物大辞典 第2巻 pp. 485-489
小学館
- 中村 浩 1981 園芸植物名の由来 pp. 204-207 東京書籍
- 西川綾子 2001 サルビア NHK出版
- ハッチンソン, J, メルヴィル, R (奥本裕昭訳) 植物物語 自然からの贈り物 p.201
八坂書房
- 春山行夫 1980 花の文化史 p.208 講談社

麓 次郎 1999 季節の花辞典 pp. 217-228

プリニウス, G. (大概真一郎他訳) 1994 プリニウス博物誌 pp. 179-180 八坂書房

ブリッケル, K 編集(横井政人他訳) 2003 A-Z 園芸植物百科事典 pp.926-930
誠文堂新光社

増田和夫 2006 自分で採れる薬になる植物図鑑 p. 273 柏書房